

The Indigenous in Herman Melville' s Works: Cyclical Revenge or Gospel

大島, 由起子

<https://hdl.handle.net/2324/1931989>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (文学) , 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	大島 由起子			
論文名	メルヴィル文学に潜む先住民——復讐の連鎖か福音か <i>The Indigenous in Herman Melville's Works: Cyclical Revenge or Gospel</i>			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副査	九州大学	教授	鶴飼 信光
	副査	九州大学	教授	小谷 耕二
	副査	九州大学	准教授	武田 利勝

論文審査の結果の要旨

ハーマン・メルヴィルの作品における人種研究はこれまで黒人表象研究を中心に進展してきたが、先住民について触れられることはほとんどなかった。本論文はメルヴィル文学において、先住民に関わる主題が黒人問題と同程度以上に重要であることを主張している。これまでは白人至上主義の時代背景に応じて先住民擁護の内容は検閲によって削除されざるをえなかったため、メルヴィルは修辞を磨き上げ、表面的なテーマに覆い隠すようにして自らの見解を伝えようとしていた。本論文はその隠された先住民擁護のテーマをあぶり出すことを目的としている。

第一部では『白鯨』において先住民擁護のテーマをはっきりと意識するようになるまでの作品を、メルヴィルの伝記的事実にもとづきながら論証していく。作家になる以前のポリネシアにおける食人族との生活は、メルヴィルにとって非西洋の先住民の民に対する先入観を改めるきっかけとなった。度重なる出版社による検閲、偏見に満ちた白人作家による先住民表象を読んだこと、最高裁判所の裁判官であった義理の父との関係など、様々な要因の中でメルヴィルは次第に先住民のテーマを温め、それを表現する修辞を磨いていったのである。しかしながら著者は必ずしもメルヴィルの革新性を賞賛するだけでなく、限界もあったことを慎重に指摘しており、バランスの取れた作家観を提供している。

第二部では当時の歴史的、文化的、文学的背景に依拠しながら、『白鯨』以降の隠された先住民表象を暴き出し、先住民性を託された人物が白人に復讐を企てる裏側のプロットを読み取っていく。一見すると白人だけの物語、先住民とは関係ない物語が、当時のピーコット戦争や強制移住といった背景知識を重ね合わせることで、実のところ、白人による先住民迫害に抗議し、報復しようとしながら復讐の連鎖を生み出す物語として読めるのである。そのように読むことで、例えば『白鯨』は先住民ピーコット族の名を冠した船に乗り、先住民性を担わされたエイハブが〈白さ〉に反逆する物語として立ち現れてくる。

第三部では、一転して白人と先住民の人種を超えた融和のモチーフを読み込む。複眼的な幅広い価値観を持っていたメルヴィルは、復讐という暗い側面だけでなく、異人種共存という楽園的イメージをも物語に埋め込んでいた。例えば『白鯨』において代表的に見られるように、エイハブの〈白さ〉への反逆という縦糸に対して白人の語り手と異人種の銚打ちとの絆は、物語の横糸として異人種が偏見を捨てて融和する福音として読めるのである。

以上のように、メルヴィルの人種表象を読み解く試みは珍しくない中で、先住民表象という先行研究で等閑視されてきた側面に光を当て、メルヴィルのほぼすべての作品を新たな解釈から検

討し直した本論文はきわめて重要な価値があるといえるだろう。

以上のように本調査委員会は本論文の提出者が、博士（文学）の学位授与にふさわしいことを認める。